

基礎看護領域実習科目における技術体験リストの活用状況

今泉 郷子¹⁾ 末永 由理²⁾ 谷山 牧¹⁾ 有田 清子¹⁾ 高橋 亮¹⁾ 一柳 陽子¹⁾ 蔵谷 範子¹⁾

要 旨

A 短期大学における基礎看護学領域実習科目での看護技術体験リストの活用状況を明らかにすることを目的に、平成17年度に2年次の基礎看護学領域実習科目を履修した学生83名を対象に自作の「看護技術体験リスト活用状況に関するアンケート調査を行った。有効回答数は62件（回収率75%）だった。体験リストへの記入時期では、「実習ごとの記入」と回答したものが最も多く41.9%、次に「思い出したとき」が30.6%だった。活用状況について、「非常にあてはまる」・「あてはまる」と回答したものが多かった項目は順に、「修得レベルの確認」が70.9%、「未経験技術の確認」64.6%、「経験回数の確認」64.6%であったが、「受け持ち患者選択時の参考」について、「あまりあてはまらない」・「まったくあてはまらない」と回答したものが88.7%と多く、患者選択時にはほとんど活用できていなかった。体験リスト記入に対する意見について、「役に立った」という項目について「非常にそう思う」・「そう思う」と回答したものは63.9%、「自信につながった」56.4%、「積極的に取り組んだ」56.5%、「励みになった」45.1%のものが、「非常にそう思う」・「そう思う」と回答していたことから、約半数程度は積極的に活用し自信や励みとなっていたが、半数は、積極的な活用にはいたらず、自信や励みになるとはとらえていないことが示された。今後の課題として、体験した内容をより深めていくための振り返りの機会をつくることや、体験リストを用いる目的をより明確にしていくことが課題としてあげられた。

キーワード：看護技術教育、技術体験リスト

I. はじめに

今日、医療の著しい進歩や高齢化や疾病構造の変化など、看護に求められる役割が急速に変化している。また、看護業務も複雑化、多様化していることから、看護基礎教育での看護実践能力育成の充実も求められている。2006年3月から厚生労働省では、「看護基礎教育充実に関する検討会」を開催し、第6回会議での中間とりまとめの中で看護基礎教育における課題への対応として、“患者を通して日常生活の援助技術を十分に経験できるようにすること、与薬や注射、医療機器の取扱い、モニタリングなども実習で実施すること、臨床薬理や安全管理などの知識・技術を確実に修得すること”などの提案を行っている¹⁾。

このような状況の中で、看護基礎教育の現場でも、

技術力向上に向けた様々な取り組みを行っている。その一つの方法として、看護技術体験リスト（以下、体験リスト）が多くの教育機関で活用されている。中には、修得状況を確認するために自己・他者チェックできるものを工夫する²⁾、電子媒体を用いたもの³⁾なども報告されている。

筆者らが所属する短期大学でも、3年次応用領域実習科目である成人看護実習と老年看護実習で、技術到達を評価するための技術チェックリストの活用を行っていたが、1・2年次基礎領域実習科目から活用し継続した技術教育を行えることが望ましいと考え、基礎看護領域実習科目でもこの技術チェックリストの活用をしていくこととした。しかし、対象は1・2年次生であることから、到達状況ではなく自己の学習履歴として確認し学習への動機付けとなることを期待し、技術体験リストとして、体験回数を記載できる形式で導入するようにした。

昨年、筆者らはその活用状況について報告した⁴⁾。

1) 川崎市立看護短期大学

2) 東京医療保健福祉大学

その結果もふまえ、今回は学生への提示方法などの工夫を追加した上で実施したので、その活用状況について報告し、体験リストを用いることでの技術力向上への効果とその課題を検討したい。

Ⅱ. 目的

A 短期大学における基礎看護学領域実習科目での看護技術体験リストの活用状況を明らかにする。

Ⅲ. 方法

1. 対象

A 短期大学にて、平成17年度に2年次の基礎看護学領域実習科目を履修した学生 83名。

2. データ収集方法

平成17年度終了後、対象者に自作の「看護技術体験リスト活用状況に関するアンケート」を配布し、留め置き法にて回収した。アンケート内容は、表1のとおりである。体験リストの活用状況として5項目、体験リストに対する意見として7項目について、“非常にそう思う（または非常にあてはまる）”～“全くそう思わない（または全くあてはまらない）”までの4段階リッカートスケールを用いて回答してもらった。

3. データ分析方法

アンケート内容の項目ごとに集計し、記述統計処理を行った。

表1. アンケート内容

1. 体験リストを記入した時期について
①技術を実施した後、その都度記入した
②一つの実習が終了するごとに記入した
③思い出したとき、気が向いた時に記入した
④今回リストを提出する前に記入した
⑤その他
2. 体験リストの活用について
①受け持ち患者を選択するときの参考にした
②体験していない技術を確認するために使った
③各技術の習得レベルを確認する為に使った
④自分の技術の体験回数を確認するために使った
⑤活用していない
3. 体験リストへの記入について
①記入することで自信につながった
②体験した技術の数が増えると嬉しくて励みになった
③何のために記入しているのかよくわからなかった
④体験していない技術に積極的に取り組もうと思った
⑤記入するのが大変だった
⑥実習する上で役に立った
⑦記入するのが面倒だった
4. 技術体験リストに関する意見・感想について（自由記載）

理を行った。自由記載項目については、技術体験リストの活用に関する内容を抽出し、類似するものをカテゴリー化した。

4. 倫理的配慮

対象者には、書面にて本研究の主旨、研究参加の自由・プライバシーの保護・回答の有無や内容は成績への影響がないことを説明し了解を得た。

Ⅳ. 基礎看護学領域実習科目の紹介

および、看護技術体験リストの使い方に関する学生への提示方法について

1. 基礎看護学領域実習科目について（表2、3）

A 看護短期大学基礎看護学領域実習科目として、1年次に健康生活援助実習Ⅰ（1単位）、2年次に健康生活援助実習Ⅱ（2単位）、受療過程援助実習（2単位）、回復過程援助実習（2単位）を開講した。学生は、健康生活援助実習Ⅱを履修した後、受療過程援助実習と回復過程援助実習を交互に履修した。

健康生活援助実習Ⅰ・Ⅱでは、対象への生活援助を通して、看護の基本的な導き方や援助技術の基本を修得することをねらいとしていた。学生5人／グループに対して教員1名が指導を担当した。

受療過程援助実習では、主に周手術期にある対象への看護援助について、回復過程援助実習では、急性期やリハビリ期など各病期に応じた看護援助について学ぶことをねらいとしていた。両実習科目とも、7～8人／グループに対して教員1名が指導担当となっていた。

全ての実習病棟で臨床実習指導者が配置されていたが、学生の指導だけを担当している場合と、自ら受け持ち患者を持ちながら学生指導を担当している場合など、指導体制は病棟やその時の状況によって様々であった。

表2. 基礎看護領域実習科目

科目名	開講時期	単位
健康生活援助実習Ⅰ	1年後期	1単位
健康生活援助実習Ⅱ	2年後期	2単位
受療過程援助実習	2年後期	2単位
回復過程援助実習	2年後期	2単位

表 3. 基礎看護領域実習科目の実習目的

科目名	実習目的
健康生活援助実習Ⅱ	さまざまな機能障害によって健康生活を逸脱した対象を理解し、対象にとってのよりよい看護援助について学ぶ。
受療過程援助実習	治療の中でも特に手術療法を受ける対象に対して、手術による生活機能への影響を最小にし、患者の早期回復と社会復帰を援助する看護を学ぶ。
回復過程援助実習	病とともにある対象の回復過程とその局面を理解し、長期的視野にもとづいた、対象にとってのよりよい方向としての回復過程を促す援助を学ぶ。

(平成17年度A短期大学HANDBOOKより転載)

2. 看護技術体験チェックリストの使い方に関する 学生への提示方法

対象学生には、健康生活援助実習Ⅱの実習前のオリエンテーションの際に配布し、各自の技術経験状況の確認と、実習の中でより多くの技術を経験できるよう患者選定時の参考にしてほしい旨を伝えた。また、実習の中で活用していくためにもできるだけその都度記入するよう説明した。

各実習科目の中でも、随時体験リストへの記入を促す、患者選定時に体験状況を想起することを促すなどを行った。

V. 結果

1. 対象者概要

有効回答数は、62名で回収率は75%であった。

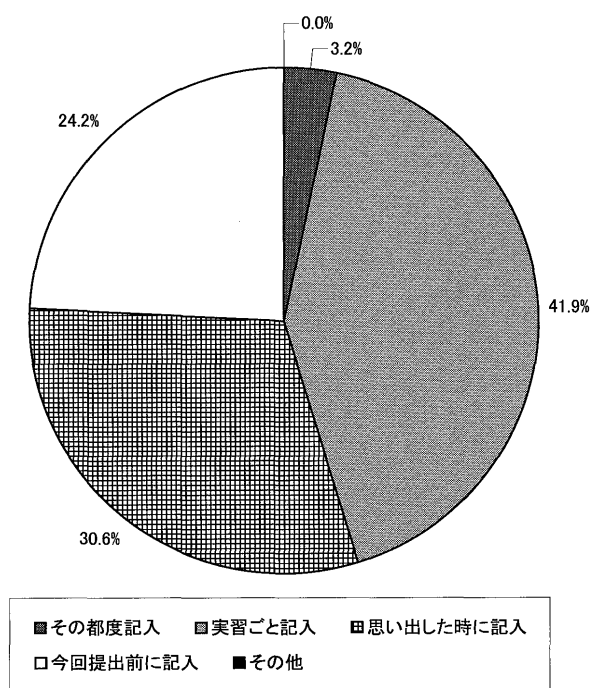


図 1. 体験リストの記入時期

2. 記入時期について (図 1)

体験リストへの記入時期として、「実習ごとの記入」と回答したものが最も多く41.9%、次に「思い出したとき」が30.6%、「今回、体験リストを提出する前」が24.2%であった。

3. 活用の状況について (図 2)

体験リストの活用状況として、“非常にあてはまる”・“あてはまる”と回答したものが多かった項目は順に、「修得レベルの確認」が70.9%、「未経験技術の確認」64.6%、「経験回数の確認」64.6%であった。

一方、「受け持ち患者選択時の参考」について、“あまりあてはまらない”・“まったくあてはまらない”と回答したものが88.7%と多く、患者選択時にはほとんど活用できていない状況であったことが明らかになった。逆説の設問として、「活用していない」の項目に“あまりあてはまらない”・“あてはまらない”と回答したものは67.8%であったことから、総合的にみて技術体験リストを活用したととらえていたものの方が多かった。

4. 体験リスト記入に対する意見について (図 3)

体験リスト記入に対する意見について、「役に立った」という項目について、“非常にそう思う”・“そう思う”と回答したものは63.9%だった。同様に、「自信につながった」は56.4%、「積極的に取り組んだ」は56.5%、「励みになった」45.1%のものが、“非常にそう思う”・“そう思う”と回答していた。そのため、総合的にみて、約半数前後の対象者らは、技術体験リストを積極的に活用したことでそれぞれの自信や励みとなっていたと考えられるが、その一方で残り半数は、積極的な活用にはいたらず、自信や励みになるとはとらえていないことが示された。

「記入が面倒」、「記入が大変」という項目については、“あまりそう思わない”・“そう思わない”と回答したものは、それぞれ67.8%と61.2%であり、記入することそのものへの負担感はありませんが生じていないことが示された。

5. 自由記載内容について（表4）

自由記載欄には、本研究テーマに関連するものとして44件の記載があった。そのほとんどが、“体験

リストの活用に対する肯定的な意見”であった。また、必要性を感じないなどの“体験リスト活用に対する否定的意見”も9件あった。記載件数は3件と少なかったが、体験したくても実施できないなど“体験技術の保障がないことについて”があり、技術が体験できることを促される一方で、体験したくてもできないことへの戸惑いを感じていることが示されていた。

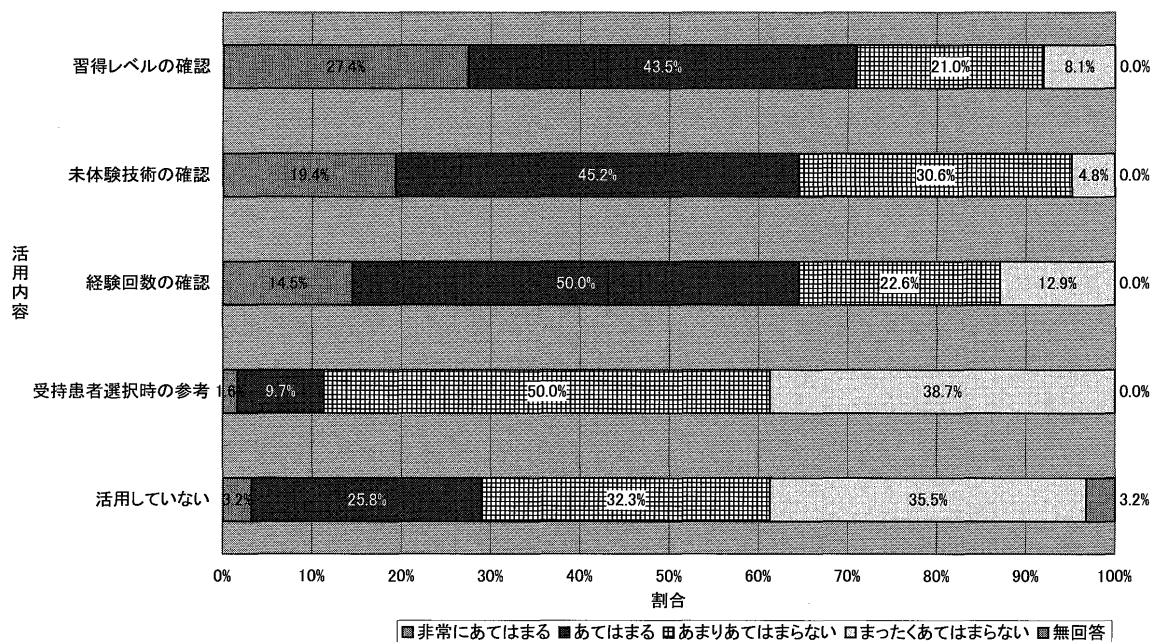


図2. 体験リストの活用状況

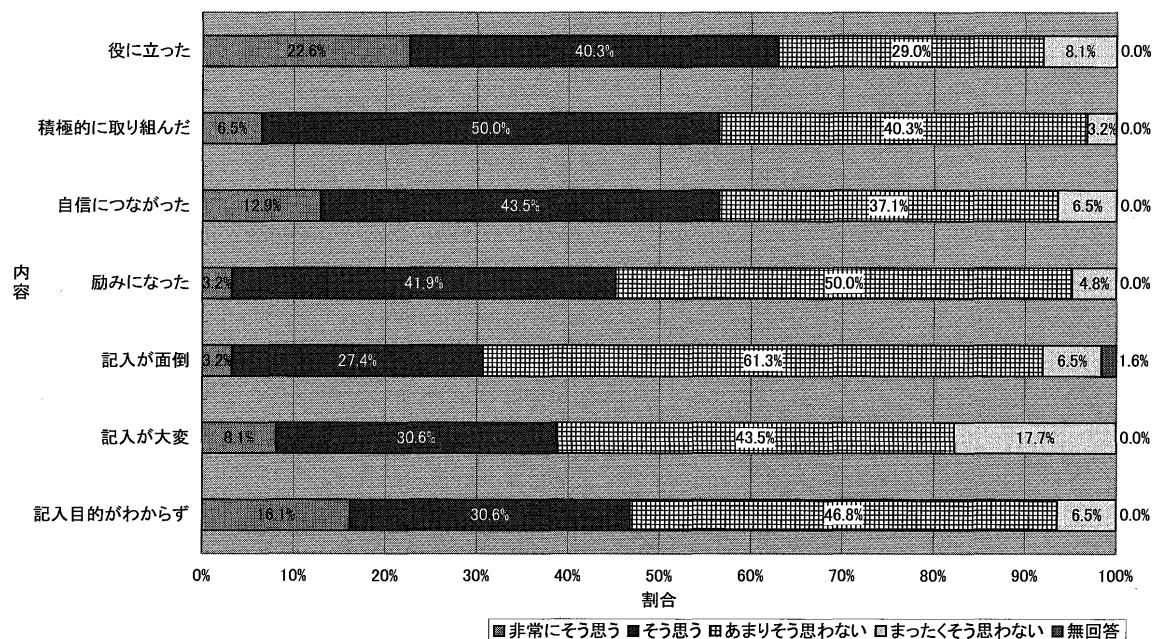


図3. 体験リスト記入に対する意見

Ⅵ. 考察

1. 技術体験リストの活用状況について

体験リストの記入時期として、「実習ごとの記入」や「思い出したとき」に記入しているものが約7割いることから、3つの実習科目を履修する期間内に記入する機会を持っていたことが示された。また、「未経験技術の確認」や「経験回数の確認」のために6割前後の対象者らが活用していたことから、概ね活用することそのものはできていたと評価できる。また、体験リスト記入に対する意見やその他の自由記載の中でも、半数前後の対象者らにとって、体験する項目や回数が増えることでの励みや動機づけにつながっていたと考えられる。

しかし、学生への提示の際に説明していた、「受け持ち患者選択時の参考」のためには9割近くのもので活用することができていなかったことが明らかになった。全ての実習が終わった「今回、体験リストを提出する前」に記入したと回答したものは約2割であったことから、記入していなかったために活用できなかったというよりは、むしろ参考にしたくてもできない状況があったことが予測される。

受け持ち患者の選定にあたっては、3科目とも実

習病棟の師長や臨床実習指導者が入院患者の中から各実習目的・目標と照らした上であらかじめ学生人数分（または、状況によっては+αの人数の）受け持ち患者候補を提示していただいていた。学生は、その候補者の中から自らの学習目標や課題に照らしつつ他のグループメンバーとも調整をしながら、自分の受け持ち患者を選択させていただくという方法で行われていた。基礎看護領域実習科目であることから、学生の学習レディネスも発展途上であり、あまり複雑な病態を呈している方々を受け持たせていただくことには難しさがあった。入院期間が短縮化している中、2週間の実習期間中継続して入院している患者の数は限られ、継続して入院している患者はより急性期的な状態であり、かつ病態も複雑な場合が多く見うけられた。そのため本研究の対象者たちにとっても、「受け持ち患者選択時の参考」として、体験リストを活用することができなかったのではないかと考えられる。

2. 看護技術力向上に向けた、

体験リスト活用の有効性と課題

本研究では、基礎看護領域実習科目における技術

表4 自由記載内容について

カテゴリー	コード
体験リスト活用に対する肯定的意見	<ul style="list-style-type: none"> ・技術の確認をする上で役立った ・経験が増えることで励みになった ・自分の技術を振り返る上で役立った 他同様 21件
体験リスト活用に対する否定的意見	<ul style="list-style-type: none"> ・必要性を感じない ・記入が大変 ・他の記録物で忙しい 他同様 6件
体験技術の保障がないことについて	<ul style="list-style-type: none"> ・体験したくてもできない 他同様 2件
他の活用法	<ul style="list-style-type: none"> ・実習での最高体験レベルの項目を活用できた 他同様 2件
書き方について	<ul style="list-style-type: none"> ・記入欄が小さい ・回数を書ききれない項目の存在 他同様 3件

体験リストの活用の実際について明らかにしてきた。その結果、技術体験リストを自分で記載していくことは実習での学習成果を示す一つの軌跡となっており、その記載が増えていくことや網羅されていくことが、自らの成長過程を確認し学習への意欲を高める機会を得る上で効果があったと考えられる。

また、このプロセスは、成人学習者としての課題である目標への達成状況を確認し、目標達成に向けて自らの学習方法を自己決定していくための機会にもなっていると考えられる⁵⁾。

しかし、体験にもさまざまなレベルがある。体験を通してその技術の原理・原則、対象の個別性をふ

まえた援助技術としてどこまで修得できていたかというものの確認も重要になってくると考えられる。藤岡は⁶⁾、臨床的な技術の深化の様相として、触れる・親しむという「技術の基礎」の相から「技術の探求」へ、そして「技術の創造」の相に深化していく有様を示している。実習の中でさまざまな技術を体験することを通して、対象者らが何を感じ、考え、何を学ぶことができていたのかということはこの体験リストを用いて振り返る機会を持つことも、技術力向上に向けた有効な手段となるのではないかと考える。

体験リストを用いることの課題として、現実の実習状況ではリストに掲載されている全ての技術項目の体験を保障できないことがまず挙げられる。体験リストへの意見や自由記載内容でも、実施したいと意欲を示しても必ず実施できないということが示されていた。

筆者らが用いている体験リストは、「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書」⁷⁾で提示された『臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準』を参考に、筆者らが所属する短期大学の応用看護領域教員が作成したものをを用いた。これは、看護学生が行う看護技術を、教員や看護師の助言や指導により単独で実施できるもの（水準1）から、実施を見学するもの（水準3）というように3段階のレベルに分類したものである。しかし、この水準は実際の教育現場の現状との乖離を指摘する報告もあるように⁸⁾、これらの項目全ての体験を保障できるものではない。また本学の場合、この内容をカリキュラムの中でどこまで修得できるように教育するかということへの合意はなされていない。

引用文献

- 1) < <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/09/s0904-3a.html> >, (参照 2006-10-22).
- 2) 土井英子他：看護技術のチェックリスト作成とその効果と課題－自己評価と他者評価を用いて－, 新見公立短期大学紀要, Vol.26, 2005, p.115-120.
- 3) 小泉仁子他：看護実践能力育成の充実に向けた電子媒体による技術チェックリストの検討 東京医科歯科大学の取り組み, 看護教育, Vol. 46, no.1, 2005, p.13-22.
- 4) 今泉郷子他：基礎領域での実習における看護技術体験チェックリスト活用の実態, 日本看護技術学会4回学術集会講演抄録集, 2005, p.102.
- 5) Patricia Cranton (入江直子他訳)：大人の学びを拓く, 鳳書房, 1999, p.68-69.
- 6) 藤岡完治他著：学生とともに創る臨床実習指導ワークブック第2版, 医学書院, 2001, p.52.
- 7) 厚生労働省：看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書, 2003.3.15.
- 8) 屋宜譜美子他：神奈川県における「看護技術の水準」に関する検討 全県の看護技術教育アンケート調査結果を踏まえて, 看護教育, Vol. 45, no.8, 2004, p.680-687.

そのため体験リストを用いていくにあたり、自己の学習履歴として振り返りのための資料となることを目的とするのか、または技術の到達確認のための資料とするのかを教員間で再確認していくことが必要である。その上で、リストの内容を検討し、かつ学生に対し目的を明確にしたうえで提示していくことが重要であろう。

VII. 結論

A 短期大学における基礎看護学領域実習科目での看護技術体験リストの活用状況から以下のことが明らかにになった。

- ①「修得レベルの確認」、「未経験技術の確認」、「経験回数の確認」として活用していたものが多かったが、「受け持ち患者選択時の参考」としては、ほとんど活用できていない状況であったことが明らかになった。
- ②技術体験リストの記載は学習成果の軌跡となり、自らの成長過程を確認し学習への意欲を高める機会を得る上で効果がみられたが、技術項目全ての体験を保障できるものではない現状から、体験リストを用いていくにあたり、その目的を明確にすることの必要性が示唆された。

VIII. 研究の限界

本研究は、1施設での単年度内での調査結果によるものであり、一般化に向けては更なる検討が必要である。

謝辞

本研究にあたり、アンケートに快くご協力いただきました学生の皆様に感謝申し上げます。